

人間の問題に影響される神
—古代イスラエルの清めの献げ物を通しての贖い—

ロイ・E・ゲイン

要旨

古代イスラエルの清めの献げ物は罪と身体に関する祭儀的な不浄を奉献者から取り去り、これらの罪悪からの残った穢れを神の聖所へともたらした。一年を通して聖所に蓄積された穢れは毎年贖いの日に特別な清めの献げ物により祭儀的に取り去られた。祭儀的な贖いについてのこの二段階の過程は、古代近東でも独自のもので、人間が引き起こした問題から人々を清めることに神が含まれていたときに、神に対する効果を認められ、強調された。

キーワード

罪、不浄、贖い、清めの献げ物、聖所

はじめに

古代近東の人々は「罪」、すなわち、道徳的な不浄と見做される「道徳上の過ち」や身体に関する祭儀上の不浄や悪霊にかられた不浄のような、他のさまざまな種類の「不浄」だと考えられたカテゴリーを注意深く意識していた。罪は穢すものとして見做されたので、一般的に「不浄」という全体的なカテゴリーが罪を含んでいた。罪と不浄の他の諸形態の両者は、古代近東の人々と彼らの安寧のためにその好意が不可欠であった神々との関係性に強い否定的な影響を及ぼしたので、可能であれば避けるべきであったし、必要であれば除去されるべきであった。

「罪」が神の規範への違反として定義されることは全く容易であった。古代近東の文化的文脈内で適用される他の「不浄」の一般的な定義はより捉えどころがなく、今なお議論される問題である¹。しかし、われわれはそのような「不浄」が基本的に、人間を超えた源（例えば、悪魔）のような一もしくはそれ以上の異常な要素、人間と超人間的な存在の関係性での有害な影響、あるいは、通常の人間の能力を超えて取り除く必要性²を含んだある種の無秩序だったと仮に提案することはできる。

本稿は初めに、全般的な見通しと、イスラエルの外の古代近東での罪や他の種類の不浄と見做される概念を確認することで、比較のための基準を確認する。その後、本稿の後半部分では、イスラエルの神ヤハウエがそれらを取り除く過程で人間の弱さに影響を受けやすく自らになるという方法で示した清めの献げ物を含む、古代イスラエルの祭儀制度がこれらの害悪を扱った方法と比較との対照をする。

古代近東の人々の罪を含む不浄

この部分ではまず罪を扱い、その後、他の不浄に関して検討する。

古代近東の人々の罪

いくつかの古代近東のテキストは人間が責任を負うべきで、その違反が罪深いものだと見做される振舞いについての神による規範を定めてきた。たとえば、ウル第三王朝期（前 2100—2000 年頃）の「ナンシェ賛歌」と呼ばれるシュメール語のテキストによれば、女神ナンシェの神殿から生計の手段や他の経済的恩恵を獲得した人は、女神の祭儀的・倫理的規則を遵守する責任があった³。祭儀的規則には練り粉のすり鉢を掃除することや夜間に火を保つことといった神殿での相当の義務の履行を含んでいた（114—115 行）。倫理的規則は威張り散らすこと、境界線

を変えること、はかりや物差しを使う際の不正行為⁴、母親による子どもたちへの不当な扱いが禁じられた（136、139、142-143、212、223行）。

新年に毎年反省と審判があり、ナンシエの規則を遵守した人々は来る年のため更新された雇用や経済的援助のための契約があったが、規則を違反した人々の契約は終わった。契約が終わりになった人々は「ナンシエの家にある試練の川」によって非難を免れ、復帰することができた（130行）⁵。この川の試練は人が有罪か潔白かどうかを試すものであったが、有罪について贖うことはできなかったようである。

神による規範を明らかにするテキストの他の例はエジプトの「死者の書」の呪文125があり、そこにはあの世での52の神々の法廷で、死者によって否認される二つの告白を含んでいた⁶。これらの潔白の表現は大部分は莫大な倫理的な振舞いだが、いくつかの祭儀的なものを含む、神々に受け入れられるものか否かという理解を反映する。否認する告白の第一の連続の終りに死者は「私は潔白だ、私は潔白だ、私は潔白だ、私は潔白だ！」と主張する⁷。これは道徳的な清さの主張を指す。同じテキストの後半部分でその人が行なった善行が列挙され、道徳的な清さが「私は口の清さ、手の清さ……である」と繰り返される⁸。しかし、神々による審判に関する「死者の書」のこの章では道徳的過ちを贖う機会とは与えられない。

いくつかの古代近東のテキストは罪を贖おうとする個人による手段を示す。注目すべき例は、「ムルシリ二世の疫病での祈り」であり、そこでは数年に及んだハッティの地で数えきれない人々の命を奪った恐ろしい伝染病を取り去るように、ヒッタイトの神々にヒッタイトの皇帝が嘆願している⁹。ムルシリが言うには彼は託宣を通じて神に尋ね、疫病の原因が以前、トウドハハリヤという名の支配者を不当に殺し、それにより彼への誓いを破ったことで、彼の父シュッピルリウマ1世によって招かれた罪であったことを知った。ここでは神による規範への二つの違反がある。つまり、殺人と誓いを破ったことである。

殺人の後、シュッピルリウマ自身は流血を贖う祭儀を行ない、ハットウサの首都の人々はしなかったが、後にムルシリが同じことをした。誰もその地の代表として贖いの祭儀を実施しなかった。しかし、ムルシリは祈りの中で誓った

彼らはあなた、〔神々〕、私の主人たちの前で、あなた、〔神々〕、私の主人たちと、疫病に関してあなたの神殿で確かめた誓いに（違反した）祭儀を行うだろう。彼らは〔……あなたの前で〕清めるだろう。そして私は、その地の代表として贖いと宥めの贈り物で、あなた、神々、私の主人たちに元の状態に戻すだろう¹⁰。

ムルシリはまた、献げ物のパンとブドウ酒、祭礼の期間すべての神々を礼拝し、祈りの中で告白と嘆願をすることにより神々の好意を回復しようと努めたが、何の利益もなかった。明らかに、ムルシリは試みたいいくつかもしくはすべての方策が、大地が負い、彼が相続した彼の父の罪を贖うことができたという可能性を信じたが、それらの有効性はそれらを受け入れるか拒絶するかという神々の意志に依存していた。

部分的に破損したメソポタミアの「正しい苦しむ人の詩」は、多くの仕方で被った個人の恐ろしい経験を物語るが、それは彼が犯してきた罪の結果だと彼は信じたが、彼はそのことについて無知であった¹¹。彼は自らの神マルドゥクと女神サルパニトゥム（マルドゥクの配偶神）に祈りの中で懇願し、彼が犯してきた過ちの中身を知ろうとし、占い師、夢解き、祭儀を行う悪魔祓い師の助けを得て問題を解決しようとした。彼は定期的におどろ酒を造り、食料の献げ物をささげ、供犠を含む祭儀を行ない、参拝し、祈り、神聖な日々や祝祭を祝った敬虔な男だったので、神々の不興が理解できなかった。最後に、敬虔な苦しむ人は軽減と回復を得たが、それは慈悲深く彼の罪を許した神との和解に帰された。

さて我々は「罪」に関する古代近東の考えのいくつかのカギとなる側面を要約することができる。第一に、神による規範に対する罪深い違反は祭儀的・倫理的なものであった。第二に、罪に対する処罰は個人やグループに影響を与え、国全体に影響を及ぼす処罰は大地によって負わされた罪の結果だと言及された。第三に、いくつかの神による審判は贖って許されることはなかった。第四に、試みた贖いの成功は神々の意志に依存していた。第五に、贖いのためのさまざまな方策が試みられたが、そこには特定の知られた違反を取り除くための宥めや贖いに関する祭儀や献げ物および／または、一般的に神々の好意を回復するための献げ物や礼拝の他形態を含んでいた。第六に、人々は間違いを犯した事柄を知らずに、神からの罰に耐えることがあった。

古代近東の人々の他の不浄

古代近東の人々は幅広い不浄に関心があった。メソポタミア人とヒッタイト人は一般的に不浄はあの世からやって来るもので、可能であればそこに返されるものだと考えた¹²。メソポタミア人はそのような不浄を悪魔のようなものだと見做した。例えば、バビロニアの春の新年祭の五日目に、「主人」を意味するベールの称号をもつマルドゥクの大エサギラ神殿に位置したナブー神のエジダ神殿の祭儀的な清めが二つの段階であった¹³。マルドゥクはバビロンの都市神であり、ナブーの父であった。この清めは祝祭に参加するため故郷の地ボルシッパから神像に

よって表現されたナブーの到来を準備するものであった。エジダは一年を通して空いており、そこは一あるいはそれ以上の悪魔がそこに住みついていると信じられた¹⁴。それゆえこの神像安置所の清めは悪魔祓いを含んでいた。

清めの第一の段階は清めるための水、レバノン杉の油、香、松明の明かりを含む媒介物の使用を伴い、不浄を吸収するためにエジダの壁を首を切った羊の死体でぬぐい、その後悪魔祓い師がその不浄を帯びた羊をユーフラテス川に投げ入れることで処分することになっていた。重要なことに、「ぬぐう」という意味のアカド語の言葉はク・ップルで、贖いの日のイスラエルの聖所の清め（レビ 16 : 16、18）を指すヘブライ語のキ・ップルと同語源であった。

人間の悪魔祓い師によってなされた第一の段階は下位の悪魔を取り去ることに成功したと見做されたが、より上位でより力を持つ悪魔はとどまることができ、その追放には神の力を必要とした。それゆえ、清めの第二の段階ではある種の黄金の天蓋がエジダを覆うように伸ばされ、大祭司や他の神殿の職員が神殿を清めるために神々を招く大声の嘆願を朗読した。その繰り返される言葉には「この神殿にいるいかなる害悪も、出ていけ！ 大いなる邪悪な悪魔よ、ベールがあなたを殺すように！ あなたがいるところはどこでも鎮められる！」という言葉を含んでいた¹⁵。

メソポタミア人とは異なり、ヒッタイト人は大部分の不浄を悪魔ではなく、非人格的なものと見做した¹⁶。ヒッタイト人は一見、古代近東の他の集団以上に不浄の不在としての清さを維持し、再び獲得することに取り憑かれていた。不浄は深刻で致命的な病気を含む、幅広い範囲の苦悩を引き起こした。いくつかの不浄は避けることができたが、いくつかは知らず知らずに招いており、他のものは防ぐことが困難であった¹⁷。

ヒッタイト人にとって、不浄には多くの源や形態があり¹⁸、伝染したり、人や動物、物体、建物、場所に付着することができた。大部分のヒッタイトの不浄は三種類に分類できる。第一に、血、性交渉、出産、死を含む、人間の身体からの排泄物、身体的活動、健康状態に由来するものである。第二に、不浄は、ゴシップ、中傷、盗み、殺人、獣姦を含む社会的な害悪からの抽象的な穢れであった¹⁹。第三に、不浄は魔術や呪術を通しての超自然的な源や呪いの結果として神々から、および／または、神による怒りのような超人的な起源であり得た。

清めの手順は対象とした不浄の性質に基づいて、多くの形態をとった。清めは性交渉の後の入浴のような簡単なものもあったが、より複雑なものもあった²⁰。祭儀はもの、動物、人間（おそらく捕虜）を離れた場所へ追い払うことや、それらと関連付けられたものを焼いたり、埋めたり、密封することにより、悪を取り

除くことができた²¹。

ヒッタイトの諸神殿とその聖物は清さの維持とそれらに影響した不浄からの清めを要求された。例えば、ヒッタイト語の「神殿職員への指示」(CTH 264)には首都ハットゥシャの王の神殿での規則が記録された²²。神々に仕える神殿の職員は洗い清められ、刈り上げられなければならない、神々のためのパンを焼く調理場は掃き、水をまかねばならなかった。これらは神殿の外での通常の日常的な活動であっただろうが、これは聖域であったゆえに、神々の好意を維持するために清潔を保ち続けることは卓越した重要性を有した²³。古代近東の人々は「自然」と「超自然」の区別がなく、ただ一つの本質的な宇宙的な共同体の相互に関係する構成要素として神々と人間の領分を見做していたので、身体的な清潔さとこのような文脈での祭儀的な清さをはっきりと区別していなかったようだ²⁴。

神々に食事や飲み物を提供する前に洗うよう神殿の職員たちに要求された行動の一つが性交渉であった。このことで家で不浄を負うことは許されていたが、聖なる物や場所を汚すのを避けるために、聖域に近づく前に清めが必要とされた。不浄そのものは罪ではないが、規則への違反が「彼への罪である」 (§14. 番人について §10 参照)。

豚もしくは犬が神殿に闖入し、調理場の木製や陶器製の器に触れた場合、神殿に属する聖なる物は不浄になり得た。おそらく穴が多く、不浄を吸収するので、器は清められることはできなかった。それゆえ、それらは捨られることになっていた (§14)。

「神殿職員への指示」で、アダ・ダガー・コヘンが指摘するように、神殿の職員は物理的な祭儀的な清さのみならず、彼らの精神上的な道徳的清さすら求められた²⁵。「指示」は神々に属するものを盗む (§§5-8、16-19) といった職務上のさまざまな罪や、祝祭を礼儀正しく祝うことを怠る (§12) といった手抜かりの罪を戒めている。テキストはこのような罪に対する贖いの可能性については言及していない。祭儀上や道徳上の清さの両方への関心を含んでいるので、「指示」はこれらの領域の間に密接な関連を強化する。

祭儀場の清めに関連する他のヒッタイト語のテキストは神テリピヌの9年目の祭儀を規定する²⁶。この祝祭の四日目に、祭儀上の役員はテリピヌ、その配偶神、他の神々の神像や祭儀の台座をテリピヌの神殿から川へ行列で運ぶために、荷馬車を用いることになっていた。そこでは川でこれらの聖なる物を祭儀的に洗い、動物供犠を献げるようになっており、その後、彼らは聖なる物を神殿へ戻すために輸送した。テキストは取り去るべき不浄の性質を特定しないが、それは明らかに期間を越えて神像と台座に蓄積した。これらの物体は不浄から保護されていな

かったが、それらが定期的な清めを受ければ、それらの聖性が無効にされることはなかった。不浄は神殿で綺麗にすることができるような通常の汚れではなく、むしろ、川で祭儀的に取り除くべきものであった。

アナトリアの神殿の清めは血の使用を含んでいた。「夜の女神」というあの世のための新しい神殿が初めて清められた際には次のような祭儀上の行動が含まれていた。「彼らは神へ一匹の羊を献げ……そしてそれを穴へ屠り落とす……。彼らは神の金の（像）、壁、新しい〔神〕の道具すべてを血で染める。そのとき、〔新しい〕神と神殿は清くなる」（§32）²⁷。

古代近東の諸文化は不浄についてのそれぞれの視点でいくらか異なることを心に留めつつ、罪ではない「不浄」の古代近東の諸概念や扱いに関して、我々はいくつかの点を要約できる。第一に、不浄は起源や本質において、身体的、社会的、超自然的であり得た。第二に、表面上日常のものである身体的な不浄は、それらが神々への関係に影響を及ぼし得たので、祭儀的文脈でさらなる重要性を帯びた。第三に、不浄は一般的に可能であれば避けるべきものであったが、それらを負ってしまえば、適切な清めの祭儀の手段で取り去るべきものであった。第四に、不浄そのものは罪ではなく不浄を負うことも許されたが、不浄に関する規則への違反は罪深いものであった。第五に、不浄は聖性と反対のものであり、それゆえ、可能であれば神殿や聖なる物から遠ざけなければならなかったが、もし穢れると、それらは祭儀的に清められなければならない、あるいは、いくつかの場合には、それらの聖性は失われ、捨て去らなければならなかった。

古代イスラエル人の、罪を含む、不浄

ヘブライ語聖書に従えば、古代イスラエル人に影響を及ぼした罪と他の不浄の諸概念や扱いは、いくつかの差異があるにしても、古代近東の他の場所でのこれらの害悪の諸概念や扱いと多くの点で類似していた。この部分では、古代近東の残りの文脈でより初期に観察されたイスラエルの罪と不浄に注目し、それにより、比較と対照を示すことで、同じ種類の点を手短く述べる。

古代イスラエル人の罪

第一に、罪は、屠られ神に献げられた後三日目に和解の献げ物の肉を食べることへの禁止（レビ 7：18）というような、祭儀規定の違反であり得た。他方、罪は、十戒（出 20 章）やそれらに関連する法（例、出 21－23 章）への違反のように、倫理的原則に対する違反でもあり得た²⁸。

第二に、罪に対する罰は個人、もしくは、イスラエル全国民（レビ 26 章）を含

む集団の責任となり得た。さらに、性的違反（レビ 18：6-20、22-23）、偶像崇拜（レビ 18：21）や殺人（民 35：33-34）は道徳的に大地を穢し、道徳的不浄がある限度に達すると、結果として人々の追放を招くことになった（レビ 18：28）。他の種類の道徳的不浄は、イスラエル人あるいはその地に住んでいる外国人居住者がその子どもたちの少しでも神モレクに献げた場合（20：3）、あるいは、ある者が死体から受けた不浄を清めるのに失敗するという罪を故意に犯した場合（民 19：13、20）、無意識に遠くから聖所を汚すことであった。これらの罪に対する罰は人々から「絶たれる」（語根 *k-r-t* からなる動詞）、すなわち、その人のその後の生を手放すという神によって管理された罰であった²⁹。

第三に、ヤハウェによるいくつかの神による審判は、神は供犠がなくても慈悲深く許し得たが（出 34：7、サム下 12：13、詩 51：2、代下 33 章；後述を見よ）、贖いの供犠を通してイスラエル人に贖いを受けることを許さなかった。その罪が「横暴な」罪、すなわち、ヤハウェを故意に冒瀆すること（民 15：30-31）を犯した人々を含む、「絶たれる」（例えば、レビ 7：20-21、25、27）という致命的な罰を受ける人々にとって、供犠による贖いはなかった。贖いの日には、断食などを通して禁欲することにより、そして、すべての仕事を控えることによって、ヤハウェへの忠誠を示したとき、すべてのイスラエル人と非イスラエル人である居住する外国人は聖所の清めの結果として道徳的な清めを得ることになっていた（レビ 16：29-31）。しかし、このことに失敗した人々は「絶たれる」すなわち「破壊される」ことになっていた（レビ 23：29-30）。したがって、贖いの日にはイスラエルの審判の日であった。

第四に、古代近東の他のいずれの地域でもそうであるように、イスラエル人が贖いを得るのに成功するかは神の意思に依存していた。贖いはある種の魔術のような、贖いの祭儀の実行を実行したことへの自動的な結果ではなかった。供犠を神が受け入れることは贖いにとって必要であった（レビ 1：4）。和解の手順を完了するための赦し、あるいは、贖いは、たとえば、「したがって、祭司は彼のために彼の罪から贖いをし、彼は許されるだろう」（拙訳〔訳註：聖書翻訳は原著者が引用するものを和訳した〕）というレビ 4：26 のように、祭司によって執り行われた贖いの供犠の結果として生じるもので、ヤハウェ自身によって保証されるものであった。祭司は贖いをする、すなわち罪人から罪の結果を取り去るが、彼は罪人を赦す権限を与えられていなかった。「彼は赦されるだろう」という受け身の表現で含意された主体はヤハウェ自身であり³⁰、違反されたものが彼の法であったので、ヤハウェのみが赦すことができた。このような赦しは自動的なものではないのだが、神は供犠が適切に実行されたのならそれを認めることを約束した。

しかし、このことは罪人が誠実であり、改悛していることを前提とする。聖書の他の箇所では、ヤハウェは偽善的な個人によって献げられた供犠や他の形式の礼拝、祈りさえ拒否する（例えば、イザ 1 : 11-15）。

第五に、イスラエル人はさまざまな方法での贖いを探し求めており、特に贖いの供犠を含み（例えば、レビ 1 : 4、4 : 20、26、31、35）、そのいくつかは告白に続くもので（5 : 5、民 5 : 7）、そのいくつかは不正をした部分への贖いの支払いに続いていた（レビ 5 : 16、23-24[英訳 6 : 4-5]、民 5 : 7）。他の古代近東の人々とは異なり、違反した種類によりヤハウェの祭儀法によって指定された供犠のタイプを献げて改悛したイスラエル人は贖いが保証された。いかなる動物供犠でも贖うことができないような、死であろうと「絶たれる」であろうと、罰が致命的であるような、余りにも大きな過ちを犯した罪人は、それでも神との関係の修復のために、罪を告白し嘆願することで、神に祈ることができた。ダビデとマナセはこの方法で神の慈悲を得た（詩 51 編[サム下 12 : 13 参照]、代下 33 : 12-13）。誤ったことをしたことについて無自覚であるが、その経験によって自らが罪を犯したに違いないと信じた個人は贖いの供犠を通して贖いを受けることができた（レビ 5 : 17-19 ; 後述を見よ）。

第六に、人は自らの違反の性質を知らずに神の不興の成り行きを経験した。しかし、他の古代近東の神々とは異なりヤハウェは国民—この場合はイスラエル—と唯一の契約／条約を結び、契約の規定がヤハウェが彼の民にしてほしいこと、そうでないことを詳細に規定した法（特に出 20-23 章、レビ 17-27 章、申 12-26 章の集成）の一部をなしていたので、これは珍しいことであつたはずだ³¹。

他の古代近東の人々も、ハムラビ法典やヒッタイト法のような法を有していたことは正しい。そのような規定はさまざまな振舞いを管理し、その違反は犯罪、あるいは、人間の支配者により管理された社会秩序の意味で罪と見做されるものであつたが、神々の全般的な支配を受けるものと見做された³²。しかし、聖書の法と一つの神ヤハウェの間関係は他の古代近東の法集といかなる特定の神々との間よりももっと直接的であつた。イスラエルの宗教が一神教であるという事実が自らが犯した超人的なことを解くために占い師を雇う必要がないので、罪を犯したと信じた人々にとっての問題を大いに単純化した。

解釈に影響ないものと考えれば、無意識のうちに神の戒めに違反したイスラエル人は、間違つたことをしたと知るようになったときのみ贖いの清めや贖いの献げ物を献げることが要求された（レビ 4 : 13-14、22-23、27-28、5 : 14-16）。誤つたことをしたことを知らずに罪による否定的な結果を経験していると気づいた人々は問題を取り除くために特定の供犠—贖いの献げ物—を献げることができ

た（レビ 5：17-19）³³。

古代イスラエルの他の不浄

第一に、イスラエル人にとって、非道徳的不浄は死後の世界から来るものではなかったし、それらの起源として悪魔的なものでもなかった。むしろ、あるものは死んだある不浄な種の動物と接触したことに由来する（レビ 11：22-24、5：2 参照）のだが、大部分が人間の身体的状態と諸活動に由来するものであった（レビ 12 章、13-15 章、民 19 章）。人間の不浄は人間の生から死への循環に明確に表れるものであり、そこには、死体（民 19 章）、男女の生殖上の漏出（レビ 15 章）、あるいは、一般に「レプラ」と呼ばれる表面的な病気（レビ 13-14 章）で、カビや衣類・家屋への他の真菌の発生と同じく、人間の魚鱗癬を含んでいた³⁴。

聖書物語において、ヤハウエはときどき、人々を皮膚病で悩ますことで罰した（民 12：10、王下 5：27、15：5、代下 26：19-20）が、不浄の起源は超人間的なものだが、不浄そのものは物理的な状態であった³⁵。非道徳的なイスラエルの不浄はそれらが分類に含まれるという意味において、通常物質的な汚れというよりむしろ概念上のものであった。例えば、死体を洗うことではそれを清めることはできなかった。しかし不浄はそれらがイスラエルの人、物、場所に付着するという意味では物質的なものであった。中傷のような（レビ 19：16）、社会的害悪は他の種類の不浄よりむしろ罪として取り扱われた。

第二に、他の古代近東の国々においてと同じく、表面上日常的であったある身体的な不浄はイスラエルの祭儀的な文脈ではさらなる重要性を帯びていた。イスラエルの祭司は聖なる幕屋に入る前にあるいは外の祭壇で祭儀を行う前には死ぬことのないように、聖所の中庭にある聖なる洗盤から取った水で手と足を洗うことが求められた（出 30：17-21）。彼らを取り去る不浄には通常の汚れを含んでいただろうが、この清めの重要性は非祭儀的な文脈で求められるだろうものをはるかに越えたものであった。

第三に、古代近東の他のあらゆる地域のように、不浄は一般的に可能であれば避けるべきものであったが、もしそれらを受ければ適切な清めの祭儀により取り去るべきものであった。生殖上の漏出を有する人に触れることによる二次的な穢れ、あるいは、人が不浄にしてしまった物に触れることによる三次的な穢れ（例えば、レビ 15：4-12）というような、イスラエルの身体的ないくつかの不浄を受けることは、可能であれば避けるべきであった。しかし、健康なあるいは不健康な生殖上の漏出（レビ 12 章、15 章）、あるいは、魚鱗癬（レビ 13-14 章）のような、意図しない身体上の機能から生じるので、いくつかの不浄は避けること

ができなかった。国の維持と発展のために必要とされた性交渉による不浄（レビ 15 : 18）や、死んだ親族を埋葬するために死者の不浄を負うこと（民 19 章）のように、他のものは許され、必要とさえされた。ある不浄は、少なくともイスラエル人のある区分には、禁じられた。例えば、全イスラエル人は不浄とされた小さい群がる動物を食べることは禁じられた（レビ 11 : 43-44）し、通常祭司は特に近い家族の一員のための場合（21 : 1-4）を除いて、死体から不浄になるべきでなかった。

男性の夢精（レビ 15 : 16-17）、性交渉（18 節）、生殖上の漏出を有した者と物理的接触による二次的な穢れ（例えば、7 節、11 節。8 節も参照—あるいは彼の唾）、生殖上の漏出の結果深刻な不浄になった人によって不浄にされた物と触れたことによる三次的な穢れ（5-6 節、9-10 節）によって引き起こされたもののように、軽微な一日の不浄からの清めのための祭儀は単純であった。すなわち、必要とされるすべてのことは、その人の衣類を洗い、水浴びをし、夕方まで待つことになっていた。しかし、より厳格な不浄、すなわち、延長された期間継続する不浄の直接的な源からの不浄への清めは清めを行っている個人からの供犠もまた求められた（例えば、14-15 節、29-30 節、レビ 14 : 10-20）。

死体は二次的な穢れであったが、死と密接に関連するので、深刻であり、七日間続いた（民 19 : 11）し、直接の接触で移ったのみならず、同じ屋根の下の人にも移った（14 節）。それゆえ、清めには赤毛の雌牛の清めの献げ物が要求されたが、これは共同体全体のために献げられた（1-10 節）もので、個人は三日目と七日目に、水と混ぜて、その灰の少量を振りまくだけでよかった（民 19 : 17-19）。

第四に、身体的な不浄そのものは、それらの身体的な不浄を取り去るために供犠を献げたイスラエル人が赦しではなく必要とされた清めを受けたという事実によって示されるように、罪ではなかった（例えば、レビ 12 : 7-8）。しかし、たとえば、禁止された不浄を負うこと（上述を見よ）やふさわしいときに清めることを失敗する（5 : 2-3）ことのような、不浄に関する規則を違反することは罪であった。

第五に、イスラエルの物理的不浄は神の聖域と衝突した。このことはこのような不浄がヤハウエへの礼儀作法と尊敬を欠いたものと見られたゆえのみならず、ヤハウエが命の神、創造主（創 1-2 章）であり、死から来る不浄や罪の結果である生から死への人間の循環（創 3 章。ロマ 6 : 23 参照）へと結び付けられるべきでなかったからだ³⁶。それゆえ、イスラエル人は不浄を聖なる場所や物から離れた状態を保っていた。例えば、出産の結果起きる出血の漏出がある女性は聖域に入ることが許されなかった（レビ 12 : 4）。イスラエル人にとって、身体的に不浄

の状態であるにもかかわらず、神聖な平和の献げ物を食べることは断固として禁じられており、この規則への違反の罪に対する罰は「絶たれる」であった（レビ 7：20-21）。死体の不浄を清めるのに失敗すれば遠くからでも聖所を汚し、その罰は「絶たれる」であった。

罪と他の不浄を取り除く方法によって影響されるイスラエルの祭儀

今まで、イスラエル人と古代近東の人々にはいくつかの違いがあるにしても、罪と他の不浄に関する鍵となる概念を共有していることを見てきた。古代近東の人々は、贖いの供犠を献げ、清めを行なえば罪を犯し不浄を負うことができたし、定期的な清めをすれば、彼らの聖所や物は一時的に不浄になることができた。しかし、個人的な罪や不浄への彼らの取り去る方法が彼らの神殿や聖なるものをいかなる点でも不浄にするようなこれらの害悪の原因になることは決してなかったし、聖なる空間、および／または、それらの内容物の清めが贖いや罪の清め、個人の不浄のいかなる結果を取り去るといった証拠もない。

対照的に、イスラエルの祭儀形態の一つの重要な特徴は全く独自のものであった。重要でない罪の残った穢れ（レビ 4：1-5：13）や、深刻な身体的な不浄であるもの（12：6-8、14：19、15：15、30）を献げる人から取り去るための清めの献げ物（*hattat* の供犠；いわゆる「贖罪の献げ物」）は、それらの穢れをヤハウエの聖なる住居やその祭司に残した（6：20-21[英訳 27-28 節]、10：17）。それゆえ、この穢れは年に一度、贖いの日に聖なる調度品とともに聖所から清められなければならない（レビ 16 章）。したがって、個人の贖いと清めは聖なる空間と物の浄化と関連していた。注目すべきことに、神によって規定された個人の問題に対して祭儀的に取り除く方法（4：1、6：17[英訳 24 節]）は贖いの日に至るまで一年を通して聖なる住居にいる神に否定的な影響を及ぼしていた。この論文の以下の部分では祭儀の詳細とそれらの含意について分析する。

一年を通して聖所への罪と不浄の転移

レビ記 4：1-5：13 は清めの献げ物の実施についての主たる指示を提示しており、それは主として怠慢に帰すべき、不注意の罪や手抜かりの重大でない罪を取り去るものであった。祭儀の手順は奉献者が犠牲獣の頭に手を置き、その後、おそらく喉を切り裂くことで（王下 10：7 参照）³⁷、動物を殺す。祭司は容器に血を集め（代下 29：22 参照）、それを聖所の部分に塗り、その後、中庭にある外の祭壇の基台にそれを注ぐことで、血の残りを片付ける。その後、奉献者はスウェト、

すなわち、固い脂肪の特定の部分を取り、スウェトを外の祭壇で焼いた。

基本的な清めの献げ物には2種類があった。第一の種類は、ヤハウエの前で共同体を代表した（例えば、28：29-30、38）高位の祭司によって、もしくは共同体全体によって負われたもので、共同体全体を巻き込んだ罪を供犠が取り去る場合に用いられた。大祭司は聖なる幕屋へ血を持って行き、垂れ幕の内側で外側の聖域に向かって、七回それを振りまき、香の祭壇の四つの角にその一部を塗った（5-7節、16-18節）。大祭司は祭壇の上でスウェトを燃やした後、動物の死体の残りを宿営地の外の、例えば人間の埋葬地など（民19：16参照）を除いた、清い場所で燃やすことでそれを片付けた（11-12節、21節）。

首長や一般のイスラエル人により犯された罪を贖うための清めの献げ物は一般の祭司により執り行われたが、外の祭壇の角に血を塗るだけであった（レビ4：25、30、34）。一般の祭司によって執り行われるこの手順は清めの献げ物が身体的な不浄を取り去る際も同じであった（12：6-8、14：19における一般の祭司参照）。レビ記4章は動物の残りの部分についてどのように扱うべきなのかについては何も述べない。しかし、レビ記6章は特に祭司に関する追加の指示の文脈でこの疑問に答える。「清めの献げ物としてそれをささげる祭司はそれを食べる。それは聖所、会見の幕屋の中庭で食さねばならない」（19[英訳26]節、CEB）。

清めの献げ物は焼き尽くす献げ物により補完されることができ、その結果、この組み合わせはより大きな清めの献げ物となった。したがって、例えば、清めの献げ物として羊や山羊を差し出すことができない貧しい人（5：6）は代わりに二匹の鳥を献げることができ、一匹は清めの献げ物として、もう一匹は焼き尽くす献げ物とした（5：7-10）。この一対の機能は清めの献げ物だけの機能と等しかった。

一年を通じて、罪を取り去るための清めの献げ物の機能は、奉獻者、この場合は罪人の代理として、彼らの罪より（欠性を表す前置詞 $\dot{m}i\ddot{s}$ ）贖う、すなわち、除去をもたらす（ $\dot{k}i\ddot{s}$ 、 $k-p-r$ のピエル語幹）ことであった（4：26、5：6、10）。つまり、罪は奉獻者から取り去られた。問題が、罪よりもむしろ身体的な不浄の場合には、清めの献げ物は奉獻者にとって個人の不浄の（ここも欠性を表す前置詞 $\dot{m}i\ddot{s}$ ）除去をもたらした（12：7、14：19、15：15、30）、つまり、奉獻者から不浄を取り去る効果があった³⁸。

ジェイコブ・ミルグロムは、罪は改悛により罪人から取り去られ、身体的な不浄は清めの献げ物を献げる前に水で洗うことで不浄な人から取り去られるのだらうと主張している。したがって、清めの献げ物はそれらの奉獻者から害悪を取るものではないだらう³⁹。ジェイムズ・A・グリーンバーグは不浄な人が供犠を

献げるために聖所に来ることは許されさえしなかつたろうことから同意している⁴⁰。しかし、ミルグロムと同様に、彼は深刻な不浄からの清めが斬新的に減らす諸段階で行われ、とその後不浄が取り去られるということを適切に認識していない。

例えば、男の子を産んだ女性の場合では、最初の七日間彼女は、月経期間として（レビ 12：2）、接触感染する不浄を有しているので、彼女は接触を通して人や物に不浄を移す（15：19－24 参照）。次の 33 日間、彼女の不浄はこのような仕方で接触感染するものではないが、「彼女の清めの期間が完了するまで」（12：4 CEB）、聖なるものに触れることも聖域に入ることもまだ許されていない。その後、彼女の「清めの期間が完了すると、息子か娘かに関わらず、母親は一歳の小羊を焼き尽くす献げ物として、家鳩あるいは山鳩を清めの献げ物として、会見の幕屋の入り口の祭司のところへ持って来なければならない」（6 節 CEB 意味を明確にするために「母」を補った一原著者）。今まで彼女の不浄は、焼き尽くす献げ物により補完される清めの献げ物が最後の残った不浄を取り除く場所である聖所に到達できるまで十分に弱められていた。「そのとき彼女は出血の穢れから清くなる」（7 節 CEB）⁴¹。

レビ記 6：20b－21[英訳 27b－28 節]にある追加の指示で、清めの献げ物に関して次のような規定が加えられている。「衣類にその血の一部がかかった場合、あなたは聖所で血のついた部分を洗わなければならない。清めの献げ物を調理した土器の容器は壊さなければならないが、青銅製の容器の場合は、磨き、水洗いしなければならない。」

清めの献げ物は最も神聖なもので、祭司はそれを聖所で食べることを求められていたので、その肉に触れるものは神聖になるので（18、20a、22[英訳 25、27a、29 節]）⁴²、多くの研究者がこれらの節を衣類の血のついた部分を洗い、祭司のために肉を調理した器を壊したり、器を磨いたり、水洗いをしたりしなければならないことが、伝染した聖性を取り除くことを意味すると解釈してきた⁴³。しかし、ジェイコブ・ミルグロムやデヴィッド・P・ライトにより指摘されるように、血のついた衣類や料理をする器に関する規則は清めの献げ物だけに適用されるので、この解釈は成り立たない。もしこの規則が聖性の伝染を扱ったのなら、それらは贖いの献げ物へと必然的に適用されるのであるが、それはまた最も神聖なものであり（7：1、6）、直接の接触によりものを神聖にした（6：10－11[英訳 17－18 節]）⁴⁴。しかし、贖いの献げ物がこれらの規則の対象であったという証拠はなく、それゆえそれらは清めの独特なダイナミクスにより要求された⁴⁵。

したがって、衣類の血の付いた部分の水洗いや器を壊したり磨き洗うことによ

り取り去られるものは聖性ではなく、彼／彼女の犠牲獣によって奉獻者から取り去られた罪もしくは不浄の穢れであった⁴⁶。聖性を祭儀的に取り去ることについてイスラエルの祭儀制度に確実な証拠はどこにもないが⁴⁷、衣類から不浄を洗い去ることが十分な証拠である（例えば、11：25、28、40、15：5-8、10-11）⁴⁸。不浄になったとき土器の器を壊すこともまた証拠である（11：33、35、15：12）⁴⁹。

聖なる伝染はレビ記 6：20-21 ではうまく意味をなさない。すでに言及した点を除けば、清めの献げ物の血が祭司の衣類にはねることや彼が容器で肉を煮るならば、なぜ聖なる伝染が問題となるのだろうか？ 祭司の衣類はすでに神聖なもので聖所に属しており、そこでそのような肉を煮る器もおそらくそうだろう。20 節の関心が俗人の衣類のみに限定され、そこから聖性を取り除くことができないならば、それを没収することができただろうし、また 20 節の規定が祭司の衣類に適用されないのであれば、なぜテキストはそうに言わないのであろうか？ 他方、奉獻者からの不浄は俗人と祭司の両者の衣類にとって問題となるので意味をなす⁵⁰。

それらの血を含む清めの献げ物の動物がそれらの奉獻者から除去される穢れを帯びたならば、なぜそのような血が奉獻者へ身体的に適用されないのかを理解することができる。祭儀的目的が彼らから害悪を取り去ることになっていたとき、罪や不浄が奉獻者のもとへ戻すのはなぜだろうか？⁵¹

今この点を考慮すべきである。もし清めの献げ物の血が、たとえば衣類のような、血と接触することで移る物へ伝染する穢れを帯びているのなら、外側の聖域や香の祭壇の角（レビ 4：6-7、17-18）に、あるいは外の祭壇の角（25、30、34 節）にであれ、祭司がそのような血を聖所に塗るとき、何が起きたのだろうか？ 祭儀的な活動は聖所から穢れを移すことであっただろう。このことは、いかにハッタトの罪や身体的な不浄が聖所へ移っており、それらがいかにして毎年の贖いの日（レビ 16 章）に聖所から取り除かれるかを説明する。

聖所に影響を与える穢れの弱さ

レビ記 6：20-21 が不浄に関連するという解釈への反対理由は、清めの献げ物が最も神聖であり聖所で食べなければならないという事実である。どうやってそのような供犠が奉獻者からやってくる罪や身体的な不浄からの穢れを帯びることができたのか？⁵² われわれは他の場所で、イスラエルの祭儀制度では聖性と不浄が

相反するもので、互いに離しておかねばならない（例えば、レビ7:20-21）ことを見てきた。レビ記15章にある生殖上の漏出からの不浄への扱いに関する続く指示では、31節で次のように戒める。「あなたは、イスラエル人の真ん中にある私の住まいを汚し、清めの献げ物が理由で死なないように、イスラエル人を不浄から離さなければならない」（CEB）。

しかし、われわれは聖書の証拠から逃れられない。逆説的に、レビ記6章でも穢れを帯びた清めの献げ物が最も神聖であることが繰り返し断言される。この穢れを帯びることが清めの献げ物の目的ではなかった。清めの献げ物の機能は奉獻者から罪もしくは身体的な不浄を取り去ることにあった。清めの献げ物が帯びている不浄は必然的な副作用であった。贖いの日に聖所から取り去られるとレビ16章に書かれている（特に16、19節）ので、聖所から穢れを帯びていることに疑問はない。

清めの献げ物によって聖所に持ち込まれた穢れの問題を小さくすることはこの穢れがそれほど重大でないという事実である。これらの供犠は深刻な物理的不浄とされているものを取り除くのであるが、個人が清めを行う前には、供犠を献げるために聖所に来るのが許されるほど不浄が弱められていたことを思い出させる（上述を見よ）。もし彼らが聖所の聖性を乱すことなく、不浄の残ったものを帯びつつ聖域に入ることができたら、それが人から動物へ、その後祭司によって聖所へ移されたので、三次的な穢れの痕跡が十分に弱くなっていたとすれば、聖所にとってそれほど重大ではなかつたろう⁵³。イスラエルでの不浄の体系において、源の不浄よりも不浄の第一の源と接触した結果の二次的・三次的な不浄は弱められていたということ覚えておく必要がある（上述を見よ）。

ハッタトの罪からの聖所の穢れに関して、これは清めの献げ物が重大でない罪を取り去るのみであったという事実により和らげられた。これらは不注意の罪（レビ4章）、時宜にかなった身体の清めを受け（5:2-3）、あるいは、誓願／誓約を実現する（4節）のを一時的に忘れた罪、あるいは他人が犯した罪に関して一時的に証言をしないでおくこと（1節）を含んでいた。罪人の改悛は贖いを受けるために聖所へ清めの献げ物を持って来たことにより指示されるように、ある場合には告白の後に求められ（5:5）、おそらくより一層穢れを小さくしていた。その後、残されている穢れの微量が奉獻者から犠牲獣へ移され、その後、祭司から再び聖所へと三次的な穢れのみが移されたのである。

次の点について注目すべきである。第一に、清めの献げ物によって贖われる罪が聖所、聖なる空間の物理的構造を汚す穢れの原因であるという事実が、罪が不浄の形式であるという事実を典型的に示している。他の例は贖いの日のアザゼ

ルの山羊の祭儀である。山羊は罪のみを、つまり、道徳的な誤りを帯びたが（レビ 16：21-22）、荒れ野へとそれを導く男はその後、衣服を洗い、入浴することで、身体の清めを行なった（26 節）。第二に、清めの献げ物は一年を通して微量のみ聖所へ穢れを移したが、穢れは蓄積したものの限度を超えないように年に一度取り去られた。第三に、これらの穢れのすべてが象徴的で観念的であった。それらは物質的な形態で存在しなかった。

贖いの日の聖所からの罪と不浄の除去

贖いの日に、大祭司は一年を通して聖所に蓄積された罪と不浄を特別な清めの献げ物によって取り去るが、それは聖所のさまざまな部分に血を塗ることであった。つまり、内側の聖域、外側の聖域、外の祭壇である（14-19 節、20、33 節参照）。動物の肉は、穢れを吸収したので、宿营地の外で灰にされた（27 節）。

レビ記 16：16 では大祭司がここで「聖所」と呼ばれる内側の聖域と、「会見の幕屋」（の残りの部分）である外側の聖域から一掃する（キツペル……ミン）害悪を列挙する。これらは物體的な穢れ、ペシヤアの罪とハッタトの罪である。大祭司はまた、（本来ならば並ぶものを、第一の項目である穢れに言及することで他を省略している）これらの不浄と道徳的誤りを外の祭壇から取り去り、再び聖別するために（18-19 節）祭壇に血を塗る。

一年を通して清めの献げ物は身体的な不浄の事例では外の祭壇に、罪の事例では大部分がその祭壇へ血を塗ることを含んでいたのだが、不浄と罪は内側の聖域と外側の聖域に影響を及ぼしたことに注目すべきである。祭壇は聖所の不可分の部分であり、そのため、そこに起きたこと「すべてのための部分」のように、聖所全体に影響を与えた。人間の問題の結果は、内側の聖域、契約の箱—その上と両側にヤハウエが座している（出 25：22、民 7：89、サム上 4：4 参照）ケルビムがその上に置かれる—を含む、ヤハウエの住まい全体に影響を与えた。

贖いの日に聖所から取り去られたハッタトの罪は一年を通して清めの献げ物によって贖われるものだが（例えば、レビ 4：3、14、23、26、28）、ペシヤアの罪は五書の祭儀法全体の中で、レビ 16：16、21 の贖いの日の文脈にのみ言及されるものである。この罪への供犠はなかったので、不浄やハッタトの罪のように清めの献げ物を通して聖所に入ることはなかった。したがって、ペシヤアの罪—これは「背きの罪」と訳されることができ—は、モレク礼拝（20：3）や死体の不浄からの清めを執り行うことに意図して失敗すること（民 19：13、20）のような、甚だしい罪によって自動的に生じた穢れにより聖所にもたらされた。

そのような遠くからの聖所の穢れはこれらの事例において証言だけがされる。

これらの罪が聖所から一掃されるべきだが、これは罪を犯した者、「絶たれた」者には利益にならなかった。罰は致命的であり、それゆえ罪人は動物供犠を通して贖いを得る機会がなかった。ジェイコブ・ミルグロムはハッタトの罪が、清めの献げ物により贖うことができ、また遠くから自動的に聖所を汚したと主張した⁵⁴が、これについては明らかな証拠はない⁵⁵。

祭司に移る有責性

衣類に飛び散った清めの献げ物の血がそれを汚し、外の祭壇あるいは外側の聖域の内部で祭司が塗る血が聖所に不浄を移すのであれば、祭司が清めの献げ物を食べる際に（レビ 6：19、22[英訳 26、29 節]）、何が祭司に起きたのか？ そのような肉を調理され入れられた器は不浄になったので、それらは壊されるか、もしくは、綺麗にしなければならなかった（21 節[英訳 28 節]）。このことは肉が、血と同様に、穢れを帯びており、肉を食べる祭司が穢れを受けただろうことを指示している。

モーセが、祭司たちが聖域で共同体の代表として（9：15 参照）開始の清めの献げ物を食べない理由をレビ 10：17 で彼らに尋ねたとき、モーセはこのことをはっきりさせた。モーセは供犠が最も神聖なもので、食べるため、つまり、ヤハウエの前で贖うことで共同体の有責性（アウオン）を負うために、祭司たちに割り当てられていることを彼らに思い出させた⁵⁶。

有責性とは、罪を犯した結果、結果として生じる責任、つまり、処罰の対象となることであった。例えば、レビ記 5：1 では、もし人がある仕方ですら罪を犯せば、罪を告白し（5 節）、清めの献げ物を献げなければ（6 節）、有責性を負った。祭司が清めの献げ物を食べたとき、有責性を負った。この方法で、民のために調停する祭司は、神がしたように（出 34：7）、有責性を負うことに参与する。有責性は物理的な聖所の構造や空間によってではなく、祭司によって負わねばならなかったが、それは人のみが罰への責を負うべきであったからである。しかし、他の人に移された際に有責性が弱くなったからか、あるいは、祭司が有責性を免除されていたからか、あるいは、有責性は祭司からアザゼルの山羊へと取り去られ、それがその有責性を荒野へと持ち去ったのか、祭司が実際に最後まで罰を受けることはなかった。

結論

われわれは聖所へ弱くなった穢れを移した結果、重大でないハッタトの罪と身

体的不浄を取り去るための清めの献げ物と、身体的な不浄ではなく、重大でない罪のための清めの献げ物が罪人から移された有責性を祭司に負わせることになることを見てきた。これらのダイナミクスは清めの献げ物に限定されたが、それは弱い穢れのみを含んでおり、ヤハウェが去るとヤハウェの住まいとしての機能を失う(エゼ 8-11 章参照)ので聖所を冒瀆するのを避けるためであったのだろう。

五書の物語によれば、ヤハウェは祭儀的指示の源泉であるが、なぜ意図した祭儀進行上の必要な副作用として、清めの献げ物によって取り去ることで彼の聖所を汚すように指示したのであろうか?⁵⁷ イスラエルの神は自らの聖所の住まいの一時の穢れや、その奉仕者である祭司により有責性を負わせることで自ら害を被りやすくし、罪の結果死ぬべき運命の病として表わされる罪や身体的不浄についてのイスラエル人の問題に祭儀による解決法を提供した⁵⁸。これは、神に関する点では供犠を含めても、自分たちの問題を解決することもできない(詩 49:8[英訳 7 節])人間たちを救うためにできることは何でもする(イザ 5:4a 参照)という彼のユニークな意志を示している。

罪の諸事例では、清めの献げ物は神の赦しに前もって必要な贖い(例えば、レビ 4:20、26、31)を提供した。赦しを認めた人のように、ヤハウェはイスラエルの至高の裁判官の役割を果たした。裁判官の役割は無実の人々の正しさを証明することであり、有罪の人々を非難することである(申 25:1、王上 8:32)。裁判官は有罪を赦すことを想定されていないが、それは適切な正義なしに慈悲を拡張することである。しかし、神がするのはまさにこのことである。それゆえ、彼の母テコアの女性が罪を負うことを申し出なければ殺人者を赦すことへの責任を負ったであろうダビデ王のように、神は罪人を赦すという司法上の責任を負っている(サム下 14:9—司法上のたとえ話の文脈で)。

神の聖所が浄化される時に、神が正しい人々のために赦してきたことを擁護し、そのような人々が改悛し神に忠実を保ったことを示しており、イスラエルの審判の日である贖いの日まで、神の住まい・中枢部の穢れや祭司が有責性を負っていることに示されるように、神は司法上の責任を負っている。神もまたこの日に自らに忠実を示さなかった人を非難することで擁護された。したがって、ハッタトの罪の扱いの二段階は、第一に罪人からそれらを取り去り、その後、聖所からそれらを一掃することで、その両者が清めの献げ物により実行されるが、罪を扱う点で、神の特性の正当化という神義論の祭儀上の制定を構成している。神が赦すという事実は神の慈悲を示す。贖いの供犠が赦しに前もって必要となり、それが聖所を汚し、その結果それが清められなければならないことは、神による弁護を表すように、神の公平さを示す。神は詩編 85:11 に示されるように、まさに

拡大された慈悲に満ちている。「誠実と真実が会う；公平と平和が口づけをする」(NJPS；他の英訳では10節)。公平と慈悲は神の愛の二側面である(出34:6-7)。したがって、「神は愛である」⁵⁹。

訳者：岩寄大悟（古代オリエント博物館共同研究員）

注

- ¹ T. M. Lemon は場所を移された事物 (Mary Douglas)、死 (Jacob Milgrom)、あるいは制御できない状態 (Eiberg-Schwartz) のような、研究者が提唱する古代近東の不浄についての全般的な原理的説明が不浄のあらゆる種類を実際に網羅する訳ではないことを示した (“Where There Is Dirt, Is There System? Revisiting Biblical Purity Constructions,” *JSOT* 37 [2013], 265-94)。
- ² 「確立された秩序のどんな混乱もある形態の不浄を引き起す」 Alice Mouton, “The Sacred in Hittite Anatolia: A Tentative Definition,” *History of Religions* 55/1 (2015), 59; Manfred Hutter, “Concepts in Purity in Anatolian Religions,” in *Purity and the Forming of Religious Traditions in the Ancient Mediterranean World and Ancient Judaism*, Dynamics in the History of Religions 3 (Leiden: Brill, 2012), 159-60, 172.を参照。
- ³ 翻訳は Wolfgang Heimpel, “To Nanshe,” *COS* 1.162: 526-31.
- ⁴ レビ 19 : 35-36 を参照。
- ⁵ Heimpel, “To Nanshe,” 528.
- ⁶ 翻訳は Robert K. Ritner, “Book of the Dead 125 (‘The Negative Confession’),” *COS* 2.12: 59-64.
- ⁷ *Ibid.*, 60.
- ⁸ *Ibid.*, 62.
- ⁹ 翻訳は Gary Beckman, “Plague Prayer of Muršili II,” *COS* 1.60: 156-60.
- ¹⁰ *Ibid.*, 152.
- ¹¹ 翻訳は Benjamin R. Foster, “The Poem of the Righteous Sufferer,” *COS* 1.153: 486-92.
- ¹² Mouton, “The Sacred,” 55-56.
- ¹³ 分析を含むテキストについては、Roy Gane, *Ritual Dynamic Structure*, Gorgias Dissertations 14, Religion 2 (Piscataway, NJ: Gorgias Press, 2004), 228-38.
- ¹⁴ マタ 12 : 43-45 を参照。
- ¹⁵ Gane, *Ritual Dynamic Structure*, 235.
- ¹⁶ David P. Wright, *The Disposal of Impurity: Elimination Rites in the Bible and in Hittite and Mesopotamian Literature*, SBLDS 101 (Atlanta: Scholars Press, 1987), 261-71.
- ¹⁷ Billie Jean Collins, *The Hittite and Their World*, SBL Archaeology and Biblical Studies 7 (Atlanta: Society of Biblical Literature, 2007), 178-9.を参照。
- ¹⁸ たとえば、Mouton, “The Sacred,” 53-54.を見よ。
- ¹⁹ James C. Moyer, “The Concept of Ritual Purity Among the Hittites” (PhD diss., Brandeis University, 1969), 50-79.
- ²⁰ 「浄化 (散水) あるいは完全な沐浴における水を使うもの；香を使うもの (燻蒸)；銀のような、純化されたと考えられた金属や鉱物を使うもの；あるいは、その色がある種の不浄を吸収するような力をもつと考えられた羊毛を使ったものなど」 (Mouton, “The Sacred,” 45)を含む様々な祭儀。

- ²¹ Wright, *Disposal*, 45-49, 271; 翻訳は Billie Jean Collins, “Pulisa’s Ritual Against Plague,” *COS* 1.62: 161.を参照。
- ²² このテキストの詳細な分析に関しては、Ada Taggar-Cohen, *Hittite Priesthood*, Texte der Hethiter 26 (Heidelberg: Universitätsverlag Winter, 2006), 33-139; 翻訳については Gregory McMahon, “Instructions to Priests and Temple Officials,” *COS* 1.83: 217-21.
- ²³ Taggar-Cohen, *Hittite Priesthood*, 123 : 「洗うことにより、祭司は清い parkui-、つまり、祭儀的に清いと見做された」。
- ²⁴ John H. Walton, *Ancient Near Eastern Thought and the Old Testament: Introducing the Conceptual World of the Hebrew Bible* (Grand Rapids: Baker Academic, 2006), 87 を参照。
- ²⁵ Taggar-Cohen, *Hittite Priesthood*, 109, 123-4.
- ²⁶ Gane, *Ritual Dynamic Structure*, 245-86, 358-60.
- ²⁷ 翻訳は Billie Jean Collins, “Establishing a New Temple for the Goddess of the Night,” *COS* 1.70: 176.
- ²⁸ 十戒と他の法の関係性に関しては、Roy E. Gane, *Old Testament Law for Christians: Original Context and Enduring Application* (Grand Rapids: Baker Academic, 2017), 239-80 を見よ。
- ²⁹ この罰に関しては、Donald Wold, “The Meaning of the Biblical Penalty *Kareth*” (PhD diss., University of California, Berkeley, 1978), 251-5; Jacob Milgrom, *Leviticus 1-16*, AB 3 (New York: Doubleday, 1991), 457-60; Baruch J. Schwartz, “The Bearing of Sin in the Priestly Literature,” in *Pomergranates and Golden Bells: Studies in Biblical, Jewish, and Near Eastern Rituals, Laws, and Literature in Honor of Jacob Milgrom*, ed David P. Wright, David N. Freedman, and Avi Hurvitz (Winona Lake, IN: Eisenbrauns, 1995), 13. を見よ。
- ³⁰ 「神についての受け身の表現」に関しては、Christian Macholz, “Das ‘Passivum divinum,’ seine Anfänge im Alten Testament und der ‘Hofstil,’” *ZNW* 81 (1990): 247-53, esp. 248. を見よ。
- ³¹ 五書の法の性質と目的に関しては Gane, *Old Testament Law for Christians*, 17-57 を見よ。
- ³² たとえば、the Prologue to the laws of Hammurabi (翻訳は Martha Roth, “The Laws of Hammurabi,” *COS* 2.131: 336-7) を見よ。
- ³³ 不幸を耐えるという点での罪の経験に関しては Bruce Wells, *The Law of Testimony in the Pentateuchal Codes*, BZABR 4 (Wiesbaden: Harrassowitz, 2004), 67-69 を見よ。
- ³⁴ Hyam Maccoby, *Ritual and Morality: The Ritual Purity System and its Place in Judaism* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), 60; 31-2, 48-50, 207-8 も参照。
- ³⁵ サム下 3 : 29 でのダビデがヨアブに発した呪い「ヨアブの家には漏出する者、レプラの者……が決して絶えないように」(ESV) を参照。
- ³⁶ Jacob Milgrom, *Leviticus 1-16: A New Translation with Introduction and Commentary*, AB3 (New York: Doubleday, 1991), 731-2, 1002-3.
- ³⁷ *Ibid.*, 154.
- ³⁸ Roy Gane, *Cult and Character: Purification Offerings, Day of Atonement, and Theodicy* (Winona Lake, IN: Eisenbrauns, 2005), 106-43; *idem*, “Privative Preposition *min* in Purification Offering Pericopes and the Changing Face of ‘Dorian Gray,’” *JBL* 127 (2008): 209–22. *Leviticus 1-16* の Milgrom に反対して、彼は一年を通して清めの献げ物が罪や不浄を聖所から取り去ると主張した(254-58)。
- ³⁹ Milgrom, *Leviticus 1-16*, 254, 256.
- ⁴⁰ James A. Greenberg, *A New Look at Atonement in Leviticus: The Meaning and Purpose of Kipper Revisited*, BBRSupp 23 (University Park, PA: Eisenbrauns, 2019), 105-7.
- ⁴¹ 諸段階での清めについては、レビ 14 章での魚鱗癬から癒された人への清めについて規定された入念な手順を見よ。そのような個人はイスラエル人の宿营地より追放された

- (13 : 46。民 5 : 1-4 参照)。清めの第一段階—二つの鳥による祭儀とそれに続く沐浴と毛を剃ること—は宿営地の外で行わなければならなかった。これが完了した後、人は清く、すなわち、その段階で十分だとされ、宿営地へ入ることを許されたが、自らの天幕に入ることは許されなかった (レビ 14 : 1-8)。7 日目に、さらに毛を剃り沐浴した後、清めを行なわれた人が再び清いと言われた (9 節)。8 日目に供犠を献げるために聖所に入ることができ (10-20 節)、その結果、残っていた不浄は個人から取り去られ (19 節)、彼は清くなる (20 節)。
- 42 おそらく同じ動物からの血が同じ効果を有しており、それゆえ、それに触れるものは何でも聖になる。
- 43 たとえば、Christophe Nihan, “The Templization of Israel in Leviticus: Some Remarks on Blood Disposal and *Kipper* in Leviticus 4,” in *Text, Time, and Temple: Literary, Historical and Ritual Studies in Leviticus*, ed. Francis Landy, Leigh M. Trevaskis, and Bryan D. Bibb (Hebrew Bible Monographs 64; Sheffield: Sheffield Phoenix Press, 2015), 118—「おそらくこの部分の最も明快な読みは通常注解者によって想定されるように、後者はハッタトの血と接触することで聖にされるとき、祭司の衣服を洗うことを指すことである」 Christian Eberhart, “Review of Roy E. Gane, *Cult and Character: Purification Offerings, Day of Atonement, and Theodicy*,” *RBL* [https://www.bookreviews.org/pdf/5068_5341.pdf] (2006): 5. を参照。
- 44 穀物の献げ物もまた最も神聖であった (2 : 3、10、6 : 10[英訳 17 節]) し、清めや贖いの献げ物と同じく直接の接触でものを神聖にした。「それらに触れるものは何でも神聖になる」 (ESV) という 6 : 11 (英訳 18 節) の要約を見よ。複数形「それら」は穀物を指しており、清めと贖いの献げ物は前節で言及されている (Milgrom, *Leviticus 1-16*, 444 を参照)。しかし、穀物には血も肉もないので、20-21 節 (英訳 27-28 節) での規定は適応されなかっただろう。焼き尽くす献げ物は明示的に「最も神聖」だとされることはないが、非祭司によってや祭司によってさえも食べられたので、疑うことなくそうだった。肉は祭壇の火ですべて焼き尽された (レビ 1 章)。しかし、6 : 20 (英訳 27 節) では規則は適用されなかった。
- 45 Milgrom, *Leviticus 1-16*, 405; Wright, *The Disposal of Impurity*, 96 n. 8; 130-31, 一年を通じて、彼らは奉献者からではなく、聖所から罪が取り去られるように維持したのだが。
- 46 Gane, *Cult and Character*, 167-76.
- 47 Ibid., 186-91.
- 48 Milgrom, *Leviticus 1-16*, 403. を参照。
- 49 「全体的に不浄を吸収してしまう穴の多い性質のため再び清められることは決してなく、不浄な土器のみを壊す必要があった (11 : 33、35、15 : 12 を見よ)」 (ibid., 405)。豚や犬により穢された神殿の器は清められることはなく、捨てねばならなかった (§14) とする、ヒッタイト語の「神殿職員への指示」と比較せよ。しかし、レビ 15 : 12 では不浄になった木製の器は水で洗うだけで保たれた。
- 50 Roy E. Gane, Paradoxical Pollution, “Purification Offerings and Paradoxical Pollution of the Holy,” in *Writing a Commentary on Leviticus: Hermeneutics – Methodology – Themes*, ed. Christian A. Eberhart and Thomas Hieke, *FRLANT* 276 (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2019), 122.
- 51 奉献者へ清めの献げ物の血の適用を欠いているということは供犠はその奉献者を決して清めないという指し示すというミルグロムの主張に反している (Leviticus 1-16, 254-6)。
- 52 Christian Eberhart, “Review of Roy E. Gane, *Cult and Character*,” 5; Jay Sklar, “Review of Roy E. Gane, *Cult and Character: Purification Offerings, Day of Atonement, and Theodicy*,” *RBL* [https://www.bookreviews.org/pdf/5068_6109.pdf] (2007): 5. を参照。
- 53 「奉献者は直接聖所を汚すことはなかった。というのは、祭司の行為からのみ残余する

影響がある。したがって、奉獻者は、身体的な不浄の状態にも関わらず平和の献げ物を食べるというような、不浄を神聖なものとも直接の接触を通してもたらずことは決してなく、レビ 7 : 20-21 (祭司に関する 22 : 1-7 も参照) に例示された規則への違反はなかった。」(Gane, “Purification Offerings,” 118).

⁵⁴ Milgrom, *Leviticus 1-16*, 257-8.

⁵⁵ Gane, *Cult and Character*, 151-7.

⁵⁶ まさに起きたことのゆえに、この機会に清めの献げ物をアロンとその子らが食べなかったことを大祭司アロンがモーセへ説明したものである (10 : 19) が、これは通常の規則であった：許可されていない火で香を献げたので、アロンの他の子であるナダビとアビフを死で襲った (1-2 節)。それゆえ、どうやらアロンと生き残った息子たちは最も神聖な供犠を食べるのにふさわしくないと感じたようだ。

⁵⁷ ペシャアの罪もまた聖所を汚したが、供犠なしで、それらは直接そのようにし、神の意思に反するものであった。

⁵⁸ 神が「あなたの罪をすべて赦し、あなたの病気をすべて癒す方」と讃えられる詩 103 : 3 を参照。

⁵⁹ I ヨハ 4 : 8、16 を参照。